「幼児の教育」復刻によせて

本田和子

「婦人と子ども(現『幼児の教育』)」が創刊された明治三十四年に、一つの雑誌が終刊を迎えた。明治十八年以降、知的女性を対象として、その啓蒙と開化に力をつくしてきた「女学雑誌」がそれである。「女学雑誌」は、明治女学校の教頭であった巌本善治が、「女学の興隆」を目的として刊行したもので、プロティスタンテイズムを基盤とし、思想・政治・文芸などのあらゆる分野にわたる総合雑誌であった。

「女学雑誌」の終焉と「婦人と子ども」の誕生が同じ年であったとは、私には、単なる偶然を越えて極めて興味深いことに思われる。もちろん、両誌の間には格別の関連もなく、恐らくただの一度の接触もなかったに相違ない。ライバル誌として競合したわけでもないから、一方が幕を下ろし、他方が七十余年の隆盛を誇ろうとも、そこに何の因果関係もないのは当然であろう。

にもかかわらず、この両者を、婦人のための教養誌という同じ文脈の中に置いてみるなら、意味深く、女性文化のある断面を切り裂いてみせてくれるのではないか。「女学雑誌」がその生涯を終え、丁度その代りのように「婦人と子ども」が発足したというこの現象をコードとして、若干の解読を試みるのも、面白い仕事であるように思う。

「女学雑誌」は、女性の地位の向上と知的啓蒙を目指して、毎号が格調の高い論説で彩られていた。女たちの視野を、身辺の雑事から解き放して、広く社会・文化に向けさせようというねらいである。但し、幾分高踏的で難解なそれらの論説が、どのていどに読者の関心を引きつけ得たかは疑問である。今日、「女学雑誌」の名は、名翻訳家として令名を馳せた若松賤子(「小公子」の初代訳者)との関連で云々されることのみ多いのに気付くとき、そのあたりのことも、幾分の推測が許されそうに思える。

ともあれ、この雑誌の中で、人気の高かった記事の一つが、「小説欄」に掲載されたそれらであったことに疑問はない。「小公子」もまた、「新訳小説」として、第二二七号の「小説欄」に登場したのが最初であった。後に、掲載の場所が「小供のはなし」欄に移され、さらに、読者・批評子の好評に答えて単行本化されたのは周知のとおりである。

「女学雑誌」もまた、女性の営みの主要なものとして、家政や育児、とりわけ後者にかなりの比重をかけていたことは事実である。医学博士何某の育児記事がしばしば誌上を賑わし、新生児の頭髪を剃ることや、虫下しを飲ませて胎便を排泄させるなどの、当時の産育の習俗に対して、新医学の立場からの警告がくり返されている。さらに、その具体化として誌面に登場したのが、「小供のはなし」欄であった。第九五号では。「孩提の翁」という署名入りの一文が、次のように斯欄開設の主旨をアピールしている。すなわち、わが国には、猿かに合戦などのような楽しい昔話があるが、その数が少なく、さらにそれらには幼児に不適当な要素も含まれている。一方、欧米には、児童文学の専門誌もあると言うことで、わが国の立ちおくれは、甚だ残念である。せめてものことに、この小さな欄を開設することにした、というのである。

この欄の起案者、そして、この文の筆者は、編集主幹であった巌本善治であろうと思われるが、彼の意識としては、附録のつもりであった「小供のはなし」欄が、最も熱心な読者を得たとは、皮肉とも言える出来事であった。そして、「女学雑誌」は、一般には、「小公子」の初出の場所として、今日までその名をとどめることになった。

「婦人と子ども」は、言うまでもなく、一般的な教養誌とはその性質を異にし、明らかに幼児教育専門誌であるから、「女学雑誌」と同列に論じられるべきではない。然し、創刊当時は、その題名が示すように、読者対象をプロの保育者に限定せず、子どもにかかわりのある女性一般が射程内に置かれていたもののようである。女性の教養も、或いはその向上も、子どもとのかかわりを抜きにして考えられない、という発想であろう。「婦人」と「子ども」を不可分の関係でとらえ、女性の教養は、子どもとの接点を通過するとき、真に生命的に開花する、と言うのである。

このことの可否は、改めて論じられてよい。然し、本誌が、後に「幼児の教育」と改名して、さらに専門性を明確にしながら、今日まで健在を誇っていることを考えるなら、そこには、見逃し得ない幾つかの真理が、含まれていると言えよう。「子育て」に焦点を当てたこの雑誌は、「女学雑誌」に比して、明らかに「実用の書」であった。「女学雑誌」上で「小供のはなし」がよく読まれたのは、一つは、それが「役立つ」からであったろう。その意味で、「婦人と子ども」は、全篇が「役立つ」或いは「役立つことに関係のある」記事で埋められている。も

ちろん、その実用性は、今日のこの種の諸雑誌に見られるように、通俗的・即効的なものではなく、明らかに、高度であり、学問的でもあるが、「子育て」という現実の営みを中心に置くという点で、それは、飽くまでも「実用の書」であった。

ところで、この「実用の書」が、ある時期から、意図的に、しかもかなり大がかりに、非実用的な側面をかかえこみ始めた。文芸記事・絵画論などに代表される芸術性の投入がそれである。新しく編集責任者となった倉橋惣三が、その推進者であったことは言うまでもない。「婦人と子ども」に連載された文芸記事の数々、それらは、マーク・トウェイン、オルコット、ポーターなどの作品紹介であったり、或いはそれらを手がかりにした人間像・子ども像の探究であったりするが、今日、盛んに行なわれているこの種の作品研究の先駆として、注目されてしかるべきであろう。さらに、倉橋惣三のユニークな絵画論は、改めて云々するまでもなく、新鮮な魅力に満ちている。

彼は、幼児教育の科学的研究に期待しつつ、同時に、いま一つの側面、すなわち、幼児に対する芸術的接近を強調した。「子育て」とは、真理の探究であると共に、美の追求でなければならないのだ。

「女学雑誌」という高踏的な教養誌の中で、いつか読者の関心が文芸欄に集中し、「婦人と子ども」という高度な実用書の中で、いつか大幅な重みが文芸欄にかけられる。前者の場合は、その実用性のゆえに、そして、後者は、その非実用性のゆえに。ここに、文学や芸術の両義性が顔をのぞかせている。と同時に、女性文化の一つのありようをも、うかがい知ることが出来る。すなわち、それは、抽象的な思想性から遠く、常に実用を志向しつつも、美との関連を不可欠とする姿なのである。

幼児の教育　第七十八巻第二号

二月号　©　定価二五〇円

昭和五十四年一月二十五日　印刷
昭和五十四年二月一日　発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行人　津守　真

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ一二ノ一
印刷所　図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京九―一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

※万一製品不良本がございましたら，おとりかえいたします。